

神の国の奥義

マラキ 3:19~24

マルコ 4:30~34

イエス様は言われます「神の国は何にたとえようか」と。私どもはこう思わないでしょうか。神の国はこの世のものでたとえられるのだろうか。「神の国」というくらいならその御国は神に属するものであるのですから、人間の理解でまたこの世のたとえで説明することは、神の国を矮小化することになるのではないかという怖れがないでしょうか。私どもはよく、すばらしいものを「たとえようもない」などと口走りますが、神の国がたとえられるというのには大きな意味があるような気がするのです。つまりこの福音書での最初のイエス様の言葉にありますように、「時は満ち、神の国は近づいた」とありますが、神の国はイエス様がこの世に来られたことにより到来してその成長が始まったのです。というのは神が人となられたことにより神の国はこの世に始まったということでもあります。神という人間の理解ではたとえようもない方が、具体的に私どもと同じ人間という姿になってこの世に来られたのです。人はその姿を見ることができ、話すことができ、聞くことができます。イエス様がどのようなお方かは、聖書を通して知ることが許されています。イエス様を知るということは、人となられた神様を知るということですので神を知るということになるのです。このように具体的な人間となってこの世に来てくださったイエス様によって神の国の到来となったわけですので、本来なら人には神の国などたとえようもないものであるはずなのが、人間の理解できるようなこの世のものでたとえられることとなったのです。それは決して神の国を矮小化していることではありません。人間のためにこの世に神の国を到来させて、人間のレベルでもたとえで理解できるようにしてくださった神様の謙卑であり恵みであり憐れみなのです。

ではイエス様は実際に神の国をこの世の何でたとえられたのでしょうか。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。」と先ず言われていることは、そばにいる人たちを見て、何でどのようにたとえたら理解できるであろうかと、その聴いている人たちのレベルに立ってたとえを考えていらっしゃるのです。イエス様のお話しというのが、単に真理を一方的にそのまま語っているというのではなく、聴いている人を考慮した、思いの深い対話形式であるということなのです。

「神の国はからし種のようなものである」と主は言われます。からし種とは、前回も私が申し上げましたように、とても小さな芥子粒のような大きさのものです。当時の人たちが知っていたような小麦の種やブドウの種ではないのです。今日ではブドウの種なしが多いのですが本来なら種はあります。若い世代の人はぶどうには種がないと思っている方もいらっしゃるかもしれません。つまりからし種とは他のどんな種よりも小さいという意味なのです。イエス様がこの世に来られたこと一人の人間としてこの世に来られたこと、そして福音を語られたこと、その最初の出来事は傍から見れば本当に小さなものであったかもしれないのですが、その中には、とても大きくなる可能性が秘められていたのです。種は蒔かれなければ発芽して成長しません。イエス様の福音も語られ、聴かれる必要があったのです。発芽した者は成長しますが、その成長についてはその大きくなる瞬間は人間には見られませんし、人が成長速度を速めることもできません。ただそのからし種は神さまが育ててくださるのです。そしてどんな種よりも小さかったものがどんな野菜よりも大きくなるのです。神の国の広がりは大いなのです。神様ご自身が大きくしてくださるのです。イエス様だけでなく、私どももからし種を蒔きます。そしてそれを成長させて大きくしてくださるのは神さまです。大きくなるというのは単に植物の大きさだけが大きくなるというだけではありません。大きなからしの木

には多くの実がなります。一粒が何十倍、何百倍の種にもなるということです。つまり語られたみ言葉、福音は増幅するということです。それは人が心配して、あくせくして何とかしようとしなくても、神様がなさってくださるので安心してお任せすればよいのです。

とは言え確かに今日の日本のキリスト教会の現状を鑑みますと、心配が募ります。将来は本当に大丈夫なのか。日本基督教団においても 20 年後 30 年後のことを考えてみますと存続に不安を覚えたりします。神様は神の国をご自身で成長させてくださるから大丈夫だと言われても、本当に神の国は大きくなり続けるのだろうかなどと、不信仰な思いが先に立ってしまいます。大阪にいました折に、日本基督教団ではありませんが、ある教会が信徒が少なくなり、牧師もおらず、これ以上教会を維持するのが不可能だということで廃止することになり、その教会の後片付けに立ち会ったことがあります。それは実に淋しいものでした。まだ使えるリードオルガンや聖書讃美歌などは是非他の教会で使っていただきたいということでした。教会の壁や備品の一つ一つに過去の信仰の先達たちの軌跡が残されているのを肌で感じつつ、それらが消えていくのが切ない思いでした。実際にこのようなことは日本だけでなく、外国でも、何百年という歴史のある教会が閉鎖されて、他の施設として利用されているケースが多くなってきているということです。

さらに私どもは今現在コロナ禍ということで、すでに一年以上その試練の内に全世界の教会が置かれています。なんとかこの危機を脱して本来の教会の礼拝と活動が為されなければなりません。神の国は成長し続けるものです。

ではわたしどもが今すべきことは何でしょうか。それは先ず第一に神の国の成長と完成を祈り願うことです。そしてそのために、自身が信仰を失わずにどのような形であれ礼拝をおささげするということです。そして、一人一人が福音のからし種を蒔き続けるということです。その蒔かれた種を大きくしてくださるのは天の神さまであることを信じて委ねていくことです。大きくなったからしの木は神の国には鳥が止まります。空を飛ぶ鳥は必ずどこかに止まって休まなければなりません。そして元気を回復したらまたそこから飛び立って戻るのです。また大きなからしの木には、鳥が巣を作り安住の場所として、生活をするようになります。小さな低い木ではそれができません。低い木は危険がいっぱいです。私がまだ若かった頃実家には一本のほどほどの木がありましたが、ある時珍しくその木にハトが巣作りをし始めました。わたしの父は自然派なので毎朝それを見て楽しみにしていました。しかし卵がかえり雛が生まれたのですがすぐに猫が嗅ぎつけて、ある日、木の下には産毛が散っていました。それを見た父は自然だからしょうがないと言っていました。木が小さかったからだ、そこに巣作りをしたからだ。と言っていたのが実に淋しそうに見えました。でもその後その猫は家になついて、両親が可愛がっていたのが何か不思議でした。

しかし神の国は安全です。巣作りしても外敵に襲われないほどに大きいのです。それに神様が敵から守ってくださいます。私どもはそこで安心して憩えるのです。空の旅で疲れた鳥が足をと寝ることができるように、人生の旅で疲れたものが休んで英気を養うことができる場所です。そこは誰が止まってもよい場所です。ユダヤ人であれ、異邦人であれ止まって安住することができる場所なのです。

神の国である大きなからしの木に宿るものには敵も味方もないのです。そこには愛と平和と安心があります。神様がこの世に小さなからし種を与えて、それを大きくしてくださるのは、私どもに愛と平和を与えてくださるためなのです。そのためにもイエス・キリストというお方を遣わせて、この世に貴重な一粒を与えてくださったのです。一粒のキリストの福音は必ず結実します。それは全能の神さまのご意志でありますから。そしてわたしどもはその木に繋がる枝となり、またその枝に多くのさすらい人を憩わせ宿らせることとなるのです。